

特集「社会基盤Ⅰ」の発刊に寄せて

八 田 泰 秀

特集「社会基盤Ⅰ」と「社会基盤Ⅱ」では、「社会基盤/社会基盤ビジネス」に関する日本ユニシスグループの基本的な考え方、および実際の取り組みを、2回にわたり紹介する。ここでの「社会基盤」とは、「社会とつながり、情報を集めて、ビジネスを創造して、成長を支えるビジネスプラットフォーム」を指し、「社会基盤ビジネス」とは、「ICTを活用し、さまざまな業種・業態と連携した新たなサービスを創出する活動」を指す。

私たちの暮らしを支えるあらゆる社会基盤は、人びとのライフスタイルや時代の変化とともに、かたちを変え、システムを変更してきた。日本ユニシスグループが2009年より毎年策定している「3～5年先のお客様におけるICT活用の未来像(Technology Foresights®)」では、スマート・エブリシングによる仕事/産業/社会/生活の変化と、社会基盤の関係を次のように描いている。“ウェアラブル機器が普及し、スマートフォン/タブレット/ウェアラブル機器が、社会基盤等に埋め込まれたITや企業情報システム、さらにはスマート・マシンと連携して動作するようになる。社会基盤を支えるITは個々のシステムが単独で機能するのではなく、クラウドとネットワークを介したスマートフォン/タブレット/ウェアラブル機器との連携により、種々の状況に応じてコントロールできる柔軟なインフラとなっていく。その結果、人々の仕事や生活における便利・快適・安全・安心が向上する。また産業と社会の運営が、より効率的・効果的になり、環境負荷が軽減される。”日本ユニシスグループは、「お客様と共にICTで“人と環境にやさしい”社会を実現する」ことを使命に、中期事業ビジョンに基づき、サービスやソリューションの提供を、「①ICTの最適化」、「②ICTを根子にした付加価値の実現」、「③ICTを活用した社会基盤」という三つの切り口で行っている。その中で、あらゆる業種のお客様とのリレーションを生かし、業種を越え、複数の異なる業種のお客様と連携したビジネス・エコシステム(生態系)を形成し、ICTを活用することでシステムがつながり、ビジネスがつながり、一社単独ではできない新しいビジネスを創出することを目指している。

今、日本は、従来のシステムが抱えるさまざまな問題を乗り越えるために、成熟した社会にふさわしい新たな社会基盤づくりを進めている。それは、個々のシステムが単独で機能するのではなく、ネットワークでつながり、状況に応じて意思をもってコントロールできるシステムであり、単なる供給口であったライフラインを、柔らかいインフラへと変える新しい社会基盤の構築である。日本ユニシスグループでは「新たな社会基盤構築において、重要な役割を果たすのがICTである」という考えのもと、さまざまなコミュニティの誕生を想定し、そこに住む人たちの目線で半歩先を捉え、求められる社会基盤の構築に必要なアーキテクチャの追求を進めている。

例えば、ヘルスケア領域では、佐渡医療圏における診療情報や薬の処方情報、健診情報などを一元的に管理し、相互参照することで円滑な医療サービスを実現する佐渡地域医療連携ネッ

トワークシステム（愛称「ひまわりねっと」）が、2013年12月に全面本番を迎えた。このような、コミュニティ内のさまざまな関連機関が枠組みを超えて連携することで実現するサービスには、いくつものニーズにワンストップで応えられる“サービスのハブ（情報や影響が伝わる中継拠点）機能”が求められる。そして、このサービスハブは、膨大な情報（ビッグデータ）の集積地になることから、それらのデータを解析し、次の展開を提案する役割も担うことになると考えている。ヘルスケア領域では、集積した情報を適切なセキュリティや個人情報保護の下で活用することが、生活習慣病と食生活の関連、病状の原因究明やその予防など、次のビジネスに向けたアプローチになる。

日本ユニシスグループは、これからも社会の変化を鋭く見据え、生活者の目線で半歩先のアーキテクチャを追求し、温もりのある持続可能な社会基盤づくりに取り組んでいきたいと考えている。本号「特集：社会基盤Ⅰ」では、公共分野を中心とした取り組みについて紹介する。これらの取り組みを通して、日本ユニシスグループに「ICTを活用した社会基盤への貢献」ができるパートナーとしての可能性、プレゼンスを見出して頂けるなら幸いである。

（執行役員 社会基盤事業推進部長）